誹諧七部集 上

774-3 済

俳諧資料カード

年代	安永三 甲午
編者(筆者)	
書名	誹諧七部集 上
備考	冬の日 春の日 阿羅野 ひさご

(下垣内 蔵)

呉市阿賀北五丁目三十三番八号
下垣内和人
電話〇八二三―七一―九八五四番
〒737

下垣内氏

木村

さいはひそのへまかりなま子周たのゑにふれ
はやけしからすへはしはつきるゆへ年ゆかしからす
あつとてちひさきあんつくとり出すこれなん
そのみ紙筆に財席く世にそて綴へしるなかりのふとし
むしろいはゞ紙綴つる人此拙筆に盛しよしくれとの
なかゝゝのまきしくさえなる色ハたくやまく身みをとへ
うとかゝ新紙かく記として冊子となして風ふうそふき
世に諷るの井しらせんとすゑのよしといきくろ
そしやふ志かしるひつんやとらふものれ紙魚つふ
虫乃まくせはりてふるかつこ好ともいまゝ
えいかいのはにかゝそしはひしよきるひとへしよみる

の篇紙さへ目にまくされまふありてよまくてん
る丹ハそろの此閑をうかゝゐまみしとあしさみれと
ひらまとれいはるのさゝ京いのもと絵をハ井しくし
諸士めれてかやはつんむし蕭約にかは詠紙
そへのかしらそ出くれさひの弟か病めハま子周
八十部を続つくのはしふまきとくはれは懐みせん
とゝす十編ハ滑稽の十編ともいつんゝ唐大和の
さられかりとゝいつしも言心同しらるへしる哉く
探りふちりそあく風月のさくらとたるけるよと

贅老水母散人呉のよんやの四書る

えつは

冬の日

笠ハ長途の雨にほころび紙衣ハとまり／＼のあらしにもめたり
侘つくしたるわび人我さへあはれにおぼえける昔
狂哥の才士此国にたどりし事を不図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身ハ竹斎に似たる哉　芭蕉
たそやとばしるかさの山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国
日のちり／＼に野に米を刈　正平
わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水
髪はやす間をしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
きえぬそとばにすご／＼となく　荷兮
影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉
あるじはひんにたえし虚家　杜国
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
霧にふね引人はちんばか　野水
たそがれを横にながむる月ほそし　杜国
となりさかしき町に下り居る　重五
二の尼に近衛の花のさかりきく　野水
蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
のり物に簾透顔おぼろなる　重五

いまぞ恨の矢をはなつ声　荷兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉
しばし宗祇の名をつけし水　杜國
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣　野水
しらじらと砕けしは人の骨か何　杜國
烏賊はゑびすの國のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけし郭公　野水
秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五
巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮
うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉
箕に鮗の魚をいたゞき　杜國
わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮
けふはいもとのまゆかきにゆく　野水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜國
廊下は藤のかげつたふ也　重五

おもへども壮年
いまだころもを振はず

はつ雪のことしも袴きてかへる　埜水
霜にまだ見る蕣の食　杜國
野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うづらふけれとくるまひきけり　荷兮

麻呂か月袖に鞨鼓をならすらん　重五
桃花をたをる貞徳の富　正平
雨こゆる浅香の田螺ほりうへて　杜国
奥のきさらぎを文城呂なきれなく　埜水
床ふけて語ればいとこなる男　荷兮
縁さまたけの恨みのこりし　羽笠
口おしと瘤をちぎるちからなき　野水
明ほのゝ麦まくひ浅らきん　重五
小三太に盃とらすひとつうたひ　芭蕉
月あき遅かれ牡丹ぬす人　杜国
縄あみのかゝりハやぶれ壁落て　重五
ありくとみゑ地蔵切町　荷兮
わすれの世とも嫁のはつかしく　杜国
あふ路いくつのきこえてハゆきさき　野水
榾をたきに餅あぶる孫やその身る　正平
うらひらきて蜜燭とむし筆　芭蕉
篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水
三線からん不破のせき人　重五
道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉
ねさめ〳〵のさても七十　杜国
奉加めす御堂に金うちひゞき　重五
ひとつの傘(カサ)の下挙(ユツ)りさす　荷兮
蓮池に鷺の子遊ぶ夕ま暮　杜国
まどに手つから薄(ウス)様(ヤウ)をとる　野水

日にきえては唐輪の髪の赤枯て　荷兮

恋せぬきぬた臨済をまつ　羽笠

秋蝉の虚に声きくしづかさは　野水

藤の実つたふ雫ぽつちり　重五

袂より硯をひらき山かげに　芭蕉

ひとりは典侍の局か内侍か　杜国

三ケ化花鸚鵡籠のなるいくさ　重五

しらかこいさむ越乃獨活苅　荷兮

つえをひく事僅に十歩　杜国

はうえんのみゝ有より落ル霜かな　重五

こもり姥とけり水のぬかつま

歯朶乃葉を初狩人乃矢に負て　野水

北の御門をおしあけのはる　芭蕉

馬糞掻あふぎに風の打かすみ　荷兮

茶の湯者おしむ野べの蒲公英　正平

らうたげに物よむ娘かしづきて　重五

燈籠ふたつになさけくらぶる　杜国

つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　芭蕉

蕎麦さへ青し滋賀楽の坊　野水

朝月夜双六うちの旅ねして　杜国

紅花買みちにほとゝぎすきく　荷兮

しのぶまのわざとて雛を作り居る　羽笠

命婦の君より米なんどこす　重五

まかきまて津浪の水にくつれ行　荷兮
佛喰たる魚解きけり　芭蕉
縣ふるはな見次郎と仰かれて　重五
五形菫の畠六反　とこく
うれしけに囀る雲雀ちり〳〵と　芭蕉
まひるの馬のねふたかほ也　野水
おかさきや矢矧の橋のなかきかな　杜国
庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮
捨し子は柴苅長にのひつらん　野水
晦日をさむく刀売る年　重五
雪の狂呉の国の笠めつらしき　荷兮
襟に高雄か片袖をとく　はせを

冬　六

あさ〳〵と摺鉢に香すさん　重五
芥子のひとへに名をこぼれ禅　杜国
三ヶ月の東は暗く鐘の声　芭蕉
秋湖かすかに琴かへす者　野水
烹る事をゆるしてはぜを放ちける　杜国
声よき念仏藪をへだつる　荷兮
かげうすき行燈けしに起侘て　野水
おもひかねつも夜るの帯引　重五
此あたり弥勒の堂のかたに入　荷兮
その年の日城下も朽しく　はせを
なに波津にあし火焼家はすゝけたれ

炭賣のをのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひを鏡磨寒　荷兮
花蕀馬骨の霜に咲かへり　杜国
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠
加茂川や胡麿千代祭り微近き　荷兮
いはくらの聟なつかしのころ　重五
おもふこと布搗哥にわらはれて　野水
うきははたちを越る三平　杜国
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火をかぬ火燵なき人を見ん　芭蕉

門守の翁に紙子かりて寝る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七ツきく　杜国
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣桜の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはず款冬を呑　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
宣旨かしこく釵を鋳る　重五
八十年を三ツ見る童母もちて　野水
なかだちそむる七夕のつま　杜国
西南に桂のはなのつぼむとき　羽笠
蘭のあぶらに卜木うつ音　芭蕉

侍ゑん家に隣る女房きうろ体　重五
約瓶に栗をひろふ日のくれ　荷兮
はやり来て撫子かざる正月に　杜国
つゞみ手向る弁慶の宮　野水
寅乃日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雲かうばしき南京の地　羽笠
いがきして誰ともしらぬ人の像　荷兮
泥にこゝろのきよき芹の根　重五
粥すゝるあかつき花にかしこまり　雨桐
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北のかたなく〳〵簾おしやりて　羽笠
ねられぬ夢を責るむら雨　杜国

田家眺望

霜月や鸛の彳々ならびゐて　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜国
音もなき具足に月のうす〳〵と　羽笠
酌とる童蘭切にいで　野水
秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉
漸くはれて富士みゆる寺　荷兮
寂寞と椿の花の落る音　杜国
茶に糸遊をそむる風の香　重五

雉追に烏帽子の女五三十　野水
庭に木曾作るこひの薄衣　羽笠
なつふかき山橘にさくら見ん　荷兮
麻かりといふ歌の集あむ　芭蕉
江を近く独楽庵と世を捨て　重五
我月出よ身ハおぼろなる　杜国
きちひ衣笛に落花を打拂　羽笠
篭輿ゆるす木戸の山あい　野水
昔城見たく蛭に洞くゞるうちのへり　芭蕉
元舍の蓑をとるよしのゝ縁　荷兮
隣のうへに尾をひく鯉を拾ひ得て　杜国
帝幸に進む水のみくすり　重五
ことしての年は小角豆は花さかし　野水
営みおそしに炭団つく臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
おるゝはすのみたてる蓮の実　芭蕉
しら川うきに飯葉のそく月のあ　重五
露をくきつに風のうかしよ　杜国
狗搗に屋根すりうる片庇　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水
え路の芋は筏も破ぬへし　芭蕉
伏見木幡は鐘なそとうし　正平
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜国
春のちるすは雪ふきしをよふ　重五

水干と秀句の聖わかやうま　丹野

山茶花匂ふ笠のこがらし　荷兮

追加

いかに見よと難面うしをうつ霰　羽笠

樽火にあぶるうかれたる雲　荷兮

とくさ苅下着に髪をちやせんにて　重五

檜笠の家を西川茶殻ちらの　杜国

狼ぶり捨かりん月みる海　芭蕉

ひすりゝ檜をきうし岐阜山　埜水

春乃日

曙んむとする人〳〵戸扣あひつゝ焚田のけふりにゆきぬ浴
し弥生ハかしこくなりゆくに並松のはれもえ〳〵わたり
ていとみとるかり宇治の枝折をなる竹墻にとちきにまち
よりなきは花宿しきしを花毎ひ出侍る

二月十八日

真かくや人さ内くれ伊勢参宮　　蒋今
桜ちる中馬なかゞく連　　宰云
山寺も月一時すし鎮るて　　雨桐
謹なりし乃火にあしるなり　　李風
あわ風ふよく〳〵噂る鶴なく　　昌圭
くもりに沖の岩黒く見え　　桃李
洗戸寺に汗の暁子脱らく　　宰云
きのふ〳〵かうき路をいそく　　芸り
文ゑの菫しるあそし土へてく　　李風
千の雫捨角たなき草　　雨桐
眺宮こる一度こ背をあざく走る　　為り
傾謀気減らくこそ嶺嶺　　昌圭
主お舞ふ読む人の前移つき　　雨桐
日こやしとのる侍曲かく里　　宰云
まる居よりちす旅奥昆杉られ　　昌圭
夜子若男（オトナ）乃家夢あくる法　　李風
祈よりき誤そよ〳〵に手鞠なるかや　　宰云

入かゝる日も蝶いそぐなるべし　蕪村
うち寄て書なくしたる家連歌で　東風
うかれ猿引棒きらしたるか　雨桐
思ふことふとさしあつる裾に切捨し　蕪村
いともかしこき上人乃許に　昌圭
松の雨も東司か門ちかう寄て　雨桐
落さしあらしもなく時雨ふる　亭云
鮒朗豆腐と菊まで作り　昌圭
茶餅寒さ秋あけぼのなり　東風
積薪生ふ蕎麦を行者院ありて　亭云
家あさと娘の名まよふ添　月　蕪村
傘の内迄片みなる雨の暮かな　東風

紅葉おらで出家なく　雨桐
おもしき洛西みちをさも寄読む　蕪村
詩瓶ひとつを二人してさげ　昌圭
世にもありある局隠れ年ありて　雨桐
把念（カタミ）にいさぎよ深養父乃菖畑　亭云
いくまぎと花と作るいとをしく　昌圭
末も見えぬまるとりようゆく　東風

三月六日此水亭にて

京言語や畑うつ山の八重ざくら　旦藁
おりかし淡うすむらうくの読　此水
春の鶯燕なりきん襟なるか　蕪村

にごくへき清みなかまし　越人

松風うきを知れぬ社の酒の醉　羽笠

賣殘しける虫をかり月　執筆

ウ

笠白きたる秦ふるひなり　野水

菊ある垣よりいそくとく　旦藁

表町ゆづりて二人髪剃ん　越人

曉いつまで車ゆくなし　荷兮

鱈負ふて大津の濱に入にけり　旦藁

何やら呼て家出乃聲　越人

旅衣あきさくりを敷なして　羽笠

萩ふとしとけす乃日乃かたら　野水

里人に薦と語れ秋乃雨　越人

月なき浪にきる石をとく搗　羽笠

あらひまる赤乃根より衣の結ふと延　野水

凪をせばまの湯乃山　旦藁

のどけしや蠶葉の被伊勢の帯　越人

内侍のえらぶ代々の眉の岡　荷兮

物おもふ軍の中は片紹り　羽笠

名も勝栗とちやよ上け　野水

大年を念佛まふるる夷が洗網　旦藁

古のことあるひとき濤や　越人

紅夕の花葉のさかえ枸杞ゑて　荷兮

ちらあやり咲をかやさし麦の穂　羽笠

一夜のいは尊らてる乃ふ寺に氷や　野水

こと魂まつるきさらぎの月　旦藁
陽炎も入踊りゆる夫婦にて　珎人
春雨袖に出舞ひさしく　荷兮
ウ
田を捨て籠る男に生れけり　羽笠
力の筋をはなし中はれ子　野水
睫や三井の末寺は流れよ　旦藁
ころびくのとりし雪の山く　越人
見たけふり九日の月寒き　荷兮
君の床と先に水なかりけり　羽笠

三月十六日旦藁か田家にまかりて

蛙のからゆくしき森の暮　野水

額にあさ経ゑ雨のしるし　旦藁
蔵まつる宿本の奥きし品りて　越人
ましく人をみんかるゝの子　荷兮
ありてはる流しの永の月夜　冬文
芦の穂を挿る傘の端　杜年
磯際に絶縁の紫の葉の集く　旦藁
岩の名より落見ゆる寺　野水
雨のけも瓶鏡せしむ煙寺河　荷兮
ひるきゝすも猿の一声に　越人
衣よる坊主が役たて捉拵く　野水
解くや折りむ杖むすふ雲　冬文
その宵を更ならぬとくやすらぬ

同十九日荷兮室にて

二

咲わけの菊にはおしき白露て　越人

秋の和名にかゝる順　旦藁

初丁の聟にころりて火を打ぬ　冬文

別の月になからしあしらる楽　荷兮

作て花はのちかりハ唐輪にて　旦藁

すゝ折ぬ比の笠もむつかし　野水

永き日やそら耗ど喰にさらん　荷兮

蓑の子芽生る五月雨の中　越人

汲鶴ら瓢ハありと米もなく　野水

連歌のもとにあするいそかし　冬文

縁蘆に筆押まさくきとせん　越人

ウ

岩苔とりの篭にさきくれ　旦藁

むさかりに衣きてあつく世の中よ　冬文

蓮二株もひろき表露庵　越人

軒〳〵の露あられさに麦綴に　旦藁

甚五郎を送るまあしの月　野水

風のなき秋の日和に網入よ　荷兮

鳥羽の湊のおどりくるひう　冬文

あさましのさこね旅へもとくる為　野水

ほうらし一節舞の名もなし　荷兮

ふるまちの若水汲に起ぬく　越人

餅をくひつゝはらふ若き代　旦藁

山も花不残ほ折ふ日中　冬文

見すてられ花に啼なり　荷兮

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のあふなき岨のくづれかな　越人

蝶水のみにおるゝ岩ばし　舟泉

きさらぎや餅酒すへき音ありて　鈍雪

行年の小菜洗ふ土器　冬蝕

鶏を育かへす鍛冶のはかなさ　荷兮

月なき雲の門ふかくあけ　執筆

春

昌陸の雲にはなれぬ御代の春　利重

元日の木のほれ繕馬足ゆるし　重五

初雲の遠里牛のなき日哉　昌碧

月きの雲海に極あり霜の末　雨桐

門に雲苫薬園の音立し　舟泉

鯉の音水玉の囲く梅白し　羽笠

舟くの小松に雪も残りけり　旦藁

曙の人顔牡丹霞にひらきけり　杜国

腰てられ里の朧ろの哉　犀夕

星ちらくのすがたの雲の花　春鹿

ちるとても小雲見らん牛の夢　鈍雪

紅日二分柳の動く白ひの哉　荷兮

先明く鶏の声ひくき霞哉　同

芹摘さけこみ沼なき瓢の哉　旦藁

せつかるゝ人の許へ行とて
こん返れとて白雲いやし夕雲雀　越人

古池や蛙とびこむ水のおと　芭蕉

余猫の臍の胡蝶のやどり哉　荷兮

山や花墻根墻根の酒ばやし　亀洞

花に埋もれて夢より直に死んかな　越人

春野吟

足跡に桜を曲る庵二つ　杜国

麓寺かくれぬものはさくらかな　李風

枝ながら桜の遅き詠かな　荷兮

餞別

花のさきてうかゝひ別哉　越人

山畑の茶つみぞかざす夕日かげ　荷兮

蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春の暮　同

夏

ほとゝきすその山を越尾をかゝし　九白

ほとゝきすゆめの嬉くめる旅枕　李風

うつゝなき枕並の背戸の一里塚　越人

うれしさは葉がくれ梅の一つかな　杜国

若竹のうしろ姿や…哉　亀洞

金球…蛍つる夜かな　舟泉

武蔵坊をとぶらふ

まくかけやよく衣の衣川　高彦

逢坂の夜は笠みゆる馬に聞く

るすがちにおもひよりけり夜の月　雄雪

老聃曰知足之足常足

夕がほに雑炊あつき藁屋哉　越人

篷舟の湖ぎはなくや蛸哉　柳雨

はくきよ八重むる中に風のかり　塵交

蕉州にはろく景き花のあらし　荷兮

蓮池の深さわするゝ浮葉哉　同

晩の夜陰葉屋の匂ひけり　昌碧

夜川の音に宿る本着る哉　[illegible]

譬喩品の三界は安楽如火宅といへる心を

六月の汗ぬぐひ居る臺かな　越人

秋

背戸の畑なすび黄ばみてきりぎりす　旦藁

或家の玉祭

魂祭はしらに向ふ夕へ哉　越人

広きくらし一筋入るる薄哉　羽桐

雲をりをり人をやすむる月見哉　芭蕉

山寺に米つくほどの月夜哉　越人

風かしく家ゝ面白や秋の月　野水

八鶴をかける屏風の絵をみて

里ちかくおりゐる鶴のこゝろせよ月見哉　同

落梧亭

こぬ庵を唐黍こゝし見やる哉　荷兮

寓居落葉

秋ひとり琴柱はづれて寝ぬ夜かな　荷兮

銀杏ハ末一てんに成にけり　舟泉

冬

ゐるハめし牛を夕日の村はづれ　杜国

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申　大垣住 如行

霜の京葬の子の落るかな　昌碧

馬をさへながむる雪のあしたかな　芭蕉

打燈の焼けれ寒き霜のくれ　越人

芭蕉翁をみをくりて帰る時

此比の氷ふみわる名残かな　杜国

隠士にゆかりある宝をあづけて

あたらしき茶袋一つ冬籠　荷兮

阿羅野

尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て名をあら野といふ何故に此名有事をしらす予はるかにおもひやるにひとゝせ此郷に旅寝せしおり〳〵の云捨あつめて冬の日といふ其日かけ相續て春の日また世にかゝやかすけにや衣更着やよひの空のけしき柳桜の錦を爭ひてふ鳥のをのかさま〳〵なる風情につきていさゝか實をそこなふものもあれはにやいとふかいしらす手をたるゝ人もしれたるかきまきれて姫ゆりのなにゝもつかす雲雀の大空にはなれて無景のきはまりなき道芝のみちしるへせむと此野の原の野守とはなるへらし

元禄二年弥生　芭蕉　桃青

花三十句

よしのにて

これはこれはとはかり花の芳野山　貞室

ゆきまつていつまてねる花のあらしかな　路通

花咲ける色うくそれの桜かな　信徳

なか北山をこしてくるよしの山　晨風

荒涼し花の清水の思かゝら　友五

山里や祭りのなかにある花桜　尚白

何事ぞ花見る人の長刀　去来

みよし乃雪きえてハ花も海すらし　野水

ちる乃ちるゝ下戸引て来るハ分ぶ　亀洞

下ゝの下此客といはれん花の宿　越人

花乃山常や折くる枝もなし　一井

見あかしもとかくかゝりぬ花の滝　津島 俊似

此寺乃いらんはいらぬ花のとき　嵐竹

ちる花も酒ぬる人をしたし　舟泉

汲汁に散てもよしや花乃陰　胡及

もつ花に誰か傘といはましし　長虹

柴舟乃花咲かゝる春の雨　津島 下放

おもしろく花よなりて逆かゝる花の枝　盤子 鷗歩

連立や従者ハおろし花乃時　荷兮

疱瘡の跡まさしくゆる花見哉　傘下

あらしふくや風車賣花のさき　爲芝

花よきてうつくしく咸ん哉　さつ

山あひ乃花乱城す日まで入前り　心苗

わかれしうや寂寞ハ句しよ花の雲　越人

なりあひやちる花をえて花掴るれ　野水

独来て友選びけり花の山　冬松

花ちるとこゝろ着かる尾上かな　冬文

首出して巣乃花見る鵯かな　荷兮

酒のみ居る人の絵に

月花もなくて酒のむひとり哉　芭蕉

ある人の山家にいたりて

檑のおもれをれまかとぬすることに　仝

杜宇二十句

ほとゝぎすいて紬をくるの手末ゆて夜かなかな　雲吟

ちる花の雨やまんとすれば郭公　素堂

月かけてまたも山ほとゝぎす初るや　詢君

いきうしき中に行きけり蜀魄　残人

旅宿の夕ぐれふくしやほとゝぎす　津高 雲下

君し子乃口よりも時鳥る　幸去

清や先んぶ乱乃つく我さしの郭公　柳風

ほとゝぎすいと小ぐらきは我の庵き

ある人のおもふて霊台やよとおもれて

我とゝぎすかちるやもちかき鳥かな　嵐渓

時鳥ちきほ宮鳴ゆやおりゝきほ　蔦林

郭公奥ゆき様かえらるや時鳥　一瞥

まつ鳴夜とはなれしや郭公　日

深山ふく

ほとゝぎす十日とまつやき枝かけ　風尻

嬉しさや旅乃くらし先のほとゝぎす　岐阜 杏雨

あつかしや今ぞ聞くきく郭公　傘下

ちかやとやかゝ横しきほとゝぎす　日

なしてるかもさとあゆりり郭公　泥竹

出あり消の月を残りをすらねば　大津 智月

よみかりとふくれ人の郭公

うつろしとうらふきねて郭公　李桃

うつくしき身のくされたるきれ　市山

月三十句

かなしさよ世のうへゆく月夜かな　十二歳 梅吉
それなりも月見る中の猫の恋　湍水
月ひとつをひとつかちの今宵かな　一ちや
雨のふることもあらしの名残あかり　越人
ありしきふかか眠むく月夜かな　昌碧
昼の葉の香は盛しや月の前　清書 市柳
我しらぬ和歌ぞて詠る月夜かな　一数
ところどもあんな紙見て月の形かな　未紅
峰近く破袍て月見んとの舟　任他
一つ家やいかいそらるなよの月　悉洞

名月は夜明るきはもなかりけり　越人
名月やとしふ十二へ及ぶなる　文鱗
名月やいはきるもて行ふく舟　昌碧
あいそつやそらしてあそぶ人の中　筆下
名月や戦の跡しと犬の声　ニ水
えんするよしえええて人の月見かな　卅水

名月の乃んなりきり

むつらしと月見る日は炎も嬉し　荷兮
いつの月もなと心て名残し　仝
名月や海も松も見え山も見え　去来
名月や下戸と下戸とのむつまじき　胡及
あいそつは皆きもなきの物ならぬ　詠壱

見月子やしばらくさびし也月の影　一髪

十三夜

新婚し秋幾夜ぞ見る月夜哉　松風

翌日

昔いふ月の氣もなし海の景　蕪村

二日

見る人もたしかさき月の夕ぐれ　仝

三日

行りのえてこそ似たる三日の月　蕪村

四日

夕月夜あんどんりして去にけり　卜枝

五日

何日とかつれなきさびしや昔の月　伊勢　一泉

六日

須川の人やかるふ比や月夜かな　尾濃　露声

七日

飯うりにてありて帰る月夜哉　岐阜　一髪

雪二十句

太祇選

雪の田や秋照との影なり色　真角

ゆきゆくに暮なんとする柳かな　蕪村

竹の雪落ちて秋なき花の朶　京　塵交

かきねるや雪積ある山の山　加生

車みて暮るゝ雪みちはしきりれ　加賀　小春

そろ〳〵と見てゐる雪の渋うちわ　越人

はつ雪に戸明ぬ留主の菴かな　之章

ものゝけの物しめて雪の一つかな　雲芳

かしき物語してしぐれの暖　二水

雪降してるまの入る紙の形　鳥仙

菊の雪も杉も寒々に枝折れ　岐阜　除風

申日けふや師走なれ〳〵と　游刀

初雪や杉しふきおろす寿龍　汰下

雪の江の大舟よりは小舟かな　芳川

雪の夜の鮭からいるゝ声ごゑし　冬文

雪の日の暮様かやしやしの声　桂夕

ちら〳〵や淡雪かゝる強飯　荷兮

中　六

はつ雪や先草履にて隣まで　路通

はゝき雑しきせんとはなりけり　野水

舟かけていくつか恥かし海の雪　芳川

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉

ゆきはるの春からもかし花の春　釈古梵

わか水やそれ千年のつるべ縄　風鈴軒

松かざり伊勢が家買人は誰　其角

うぐひすの達部子あるされ着　文鱗

月雪やはるかおもしろし一門の松　去来

かざりなふ手ふりて千年ふる柏　一晶

元日や何しるかなと待かねる　路通

元日ハ明すゝしくろかねの月　かゞ 一笑
歯固千雲の花ちる白山月　大坂 如引
曙ら社なかむる孫としの春　浪速 蕩梧
若水やうらうけてよむ花眺　惑円
伊勢浦や御木引縄も去年の春　同
まとふされ袖つゝむ白妙の梅　昌碧
去年の春ちかき包しら芋頭　之広
小帽子粟やむかしよりのまゝ　岳水
としの内千秋楽はむかしなり　同
山水を白ゆふ(?)宿霞の春　京 ...
初春のしら引馬すゝ母の松　助定
羽...のむ卯の花...　全

連うけて花の春を...　一井
うち白むる神のまつり　胡及
人のむかし...の花　古虹
...　嵐浮
さけ姫やふるき...　同
蓮はかりや...　湍水
...神の...春の夢　京 ...
のこるやしの日...　朴什
...　東文
正月の...しらや...　傘下
...関...　冬松
あいし...門...　柳風

大服はまだ年のうちなる白ひ哉　防川

暮れ行やまいれ年おとこ　大山 昌拐

傘干し園かゝりそうな棚　夕石

親子して松乃葉ちぎる都の春　壽吉

歩てしむ山家やうつろひかゝる　冊水

照りらす大の朝やたゝふくら　仝

まつまちかてふたる暮し賢魚て　越人

初寄や浜名の松みなれなり　仝

ありやしまけ浦浪まかせの春霞　為可

乃母乗乃やはら清よ明みなり　同

うめうしやむかしの春桃月つる　同

我は実用うまるまつ毛うか　僧 雅齋

春ある哉ゝ世ゝ余も来つゝ世しら年の暮　貞室

初春

若菜つむ日はまた割畑哉　残人

精出して摘もうえしか若菜哉　冊朽

七草や浅きさうもて浄子哉　津嶋 俊似

女出て鳥あしの若菜哉　かゞス 小春

例濡て袂の形かゝせし儀菜哉　萩羅

書うゝものこしてをくぬれ菜かな　岐阜 素秋

石伺くつ[illegible]梅形し夕霞　玄察

夜[illegible]振く形[illegible]東海乃富　勝歩

むかしのなじみの気来ゝりきん哉　越人

薮入もちれもとうよ形らん梅の花　嵐梧

梅わかくあしやさん白魚の中に　一髪

菜もはなきしむさん乃すいけん朝かすみ　冬松

みの山しぐれはる梅のさかり　益光

何代民部の息子寝て

此梅の世にとやかくや木や梅の花　芭蕉

うくひすの鳴てとふへる嵐の枕　其風

鶯の啼や障子の戸にきる夢も　去来

あさ川のや宮もとめるまさる鉤瓶　一桐

鶯や手ちいさき茎も捨る也　一笑

うくひす老声に眠る鉤巾かな　市柳

鶯や折しにもちりきや折さなき　子考

うくひすをにあら限に寝さやなしさかな　梅舌

はなくさにとはれの蚕か那　北浪

朝くさ柱のうゑめで鳴かな　座安

好人の出羽とうかぬる家の枝　魚文

かれ野やもあさしの一二寸　芭蕉

風そよや馬の眼かくしく　傘下

あら似たりうるさきなまけかな　洒廻

蝶をぬ戯かるしきやしの枝　荷分

當世流　十丈

つきあふし四人のぬきうんるさし乗　無氏

接手

つまの下にうつるえる浅穂かな　傘下

標

咲の詞續にあまるはくらかな　蕪竹

同

菊深く燦気のつゝぬつゝかな　卜枝

春雨

春雨ハいつともなしにてりかな　満和

同

春の雨ゆふを呼てくらし　嵐洋

谷尾顕き

ちや娘との泥つけきらは白魔かな　那水

隣の井をすまた雨ふる二三ヶ札　喜生

京白するし草のは明星かな　土宗 亀助

まくしも駒を摘かりはくくし　永泉

すこしつむやつもりや大きな手　其角

すこしたる山子のたらの土手　蓬萊

お椀やなまるたくへるつくし　笛車

川舟やまはのつとつむつくし　如文

お今日は巾にるまる光つらで　孝に

茱亭此主人池に鵜を飼せられしを余意み於し

池に鵜かし飼ふ若ハ那ふ柳かな　素堂

風の吹方は後から柳かな　那水

何ふりも那しくらり柳かな　越人

さし柳してあかるも明りや　一笑

尺まりをやゝ角をとめる柳かな　小春

すられし柳ハ風にまとうなむ　一八本

とふつきて花ともみるや冬かきけり　昌琅
さそれらも影の中まゆ柳哉　杏雨
うらゝて垣根のうへ柳かな　此橋
吹風に牛のうちむく柳けり　香雨
吹かぬ風に倒るゝよするやなぎ哉　松芳
うちかゝめ思ひの外の柳けり　按遊
りそうしき琵琶湖と吉かぬ柳哉　為々
蝙蝠手みる陰か月の柳かな　同
まつ柳よりかて酒に車哉　素秋
うかいきぬ落一ころよ柳かな　路芳
草のなか意はよ種をゆる　生梓

仲春

麦の影に菜の花うつる流れけり　不梅
菫とれ花や松葉の手にもあまる　米江
おそれ花もち菜花ようつるりあけり　傘下
なの花の畦うちのこしおかけり　住雨
うこくともえぬて畑うつ翁けり　玄米
万山平をはるゝかてうつる菜畑　呂琅
つくさまでわらくさゝうくけり　越人
麦ふ花み一年種しさかしけり　笑艸
ときし公真二さらう垣よ　陸風
手折とくほとるもおもとれる桜哉　一橋
うしろよりあゆみ外の桜けり　みく松
見こゝと山やふ風の花也　一髪

すゞ風にちらくしてふるや春の雨　野水
あふのきて麻の辺のをちこちに　徐風
こゝろよくつゝとあがれる雀かな　一帝
れうらくと論語解てやる雛かな　嘯平
手をついて歌申あぐる蛙かな　山崎 宗鑑
鳴さえていつあひするかへるかな　落梧
あらうとゝむつゝしさうな蛙　越人
いくすでに常朽る山吹のかをりかな　去来
花乃くしそはしてなく蛙かな　落梧
不図とびて池に蛙の声ぞかし　津島 暮下
雨やどりの唐桐にいるかへるかな　一井
まつ蝶の四人のつゝ出て染かへかな　柳風

桜桐のかげはとまりてさる蝶かな　抜餌
かやりかの中をあるくあるこてゆく　吹玉
かれ芒や花にとまりて行蝶　百余
芸者去
絵乃気もつかぬ土手乃董かな　忠知
ねころびし馬から下ふむ董草　荷兮
わらびの土とほかに董かな　冊水
日乃さした同乃董かな　永泉
草刈て董選出す童かな　野歩
蝶乃とまりて残る朝露かな　燭遊
麦畑の人にくるゝる壊かな　杜国
さけ山や蝶乃翅乃すゝ不　大坂 式之

ほろほろと山吹ちるか瀧の音　芭蕉
杉明にやさ咲らんし夜の雨　兆乎
山吹とてふのまぎれぬあらしかな　卜枝
一重かと山吹のぞくゆふべかな　岐阜 襟子
よしのにて山吹のこくいでるかな　同 蓮雨
あをふきも曲くゝるあぬ燕かな　去来
去年乃巣の土ぬりなをす燕かな　俊似
いまきたといはぬばかりの燕かな　長之
燕乃巣ば覗る十二三人かな　亜虹
若きかりなてくさまにはなる燕かな　鼠弾
支蔵て鳴るつゐや雉の声　旦藁
角落てやすくも見ゆる小鹿哉　蕉笠

から清に鶴よぶ浦の塩干かな　越人
おやも子もはし飲よや桃の酒　傘下
人あつむ舟と陸との塩干かな　三輪 友之
山おゆゑに花咲かゝる躑躅かな　荷兮
駒取やなくしてさゝき菜の花　兼正
篇ぶまゝ丘のほとけぬ蝶かな　亀洞
永き日や障突跡もられぬさし　卜枝
永き日や沖ある木のよりかゝる　野水
切まのあと掃へる跡残しかな　同

初夏

ころもかへや白きハ袖よりそれつゝく　路通
更衣襟もくらすやかくさます　傘下

ころもかへ刀もさしてみたれかな　釈嵐竹

肖柏老人のかきたまひしあはれ山土
香はしるかをむけし文録のくはしき
ところの気色越人がかた(?)ふると書れ
しく明るわたりの作文語の中につゞける

擬子焼香もあるしころもかへ　荷兮

山路にて

なつ来てもたゞ一つ葉の一葉かな　芭蕉

いちはつを杉としてあるかんかきつばた　一井

椋咲木の下てるるてるふもとかな　越人

切られたる夢はまことか蚤のあと　尾張 不文

ふらふらと来てしけれはすみれかな　同 荷蘿

わけゆくやあのかくれのおしの口の蓼かな　恵洞

ゆらゆらとすゝきにとまる秋螢かな　仲洞

ゆあみして子をもたせたる柳かな　洸口

まけ山に下ゆく水の浪かな　蒼子

ましましいつのまん種とて麦一穂　玄寮

植るわかき麦をまいた麦の畑かな　杜麟

まきりて麦の穂のさきにまとひつく　仙紅

むきかりし跡の里の蓬かな　経可

ちりし芥子ほたるも落て陰の嵐かな　嵐葉

ちるも聞きてあらきけしの一重かな　落梧

わか敷くおちる実をとらんとするなら　岐阜 李桃

ちり初し雨にこほるゝ芥子の花　東巡

萩かゐみて捨られぬ芥子の花　吉次

汐川の底ゆく　嵐老
蕎麦の花もえしらくなかりぬきこゆ　那紀
さわしきは多かれは見えすかつこ鳥
いたち伸る夜　柳井 元輔
青のうちちて笛ふくうしし螢哉　一髪
別州の浮なる姿にほとゝきす　不交
宗うすき帯の浮る螢かな　風節
闇なれやうつきの手螢かな　青江
糸細く過て行ぬ汲の螢哉　合咕
めぐみの橋ちてあさまの螢哉　卜枝
くさかりそれ被もまた出る清水

永のふく涼しる袖のほころひ　鴎歩
もしゆかく薄室をとふられるに
うららとのよくあやちの影摺に　秋芳
坂の也むかくに梅の一本の花ちり　小生
冬やひと夜床に雨ふるなり　李雨
雨のうら掩傘のうらに鳴坂哉　二水
蝋の座くに澄のうへとなりぬ　乙矢
蓮の花をこの浮る遙の擅に　胡及
語りて葉の花ちる思君さかな　思竹
足伸へく姫百合掛かる露哉　以橋
竹の子より焚きけてなかりぬ　長紅
笋の時なるあるしうの竹　幸牛

同じ出てひくゝてもちかき水鶏かな　野水

あらく雨に柳きはまる汀かな　大津 一銭

この比は小粒になりぬ五月雨　尚白

おしらく雨に傘しまるかきを雨かな　亀洞

波阜かな

杉すりのしさしさそふ螢縄かな　貞室

杉あり下かくれさ

柳すゝしろてやゝくかゝるしき螢哉　芭蕉

おもしく

螢のつらに蒲とおもひて嬉し　荷兮

同

魚あらし小鮎もはらん螢飼舟　越人

光よりの新しからぬ螢かな　大津 淳児

曲江に蒲のえゝぬくらはなる　林翁

野ちの巣のみえぬあかなる　路通

松笠の縄とみえあるを螢哉　卜枝

虹の根とかゝれ光中の櫛かな　洒可

蘭の花や流にそひて畜の細　今

拂ふにやあるの縁書人てらされん　越人

冷しや灯のこなたのあさ　笠蘿

百合拝や咲きよ蘂の重　旦藁

茶のめもうき

すむつきやさこよの夜の炭俵　其角

夕がほや秋はいろいろの瓢かな　芭蕉

ゆふかほの花ハ人のたちぬらし　野水

夕白ハ恨の咲るめくらさふ　備后 詩香

山路あつく夕白つんで脇のかほり　市称

名ハ落ち毎夕白に似たくなし　長虹

暮夏

楠も節くやしし蝉乃聲　昌碧

雲乃峰腰ぬけにたくむ也　野水

夕ぐれ子二筆めつゝ垣穂哉　金下

あつしさよ枝ハやゝ出来穂哉　玄吉法印

涼しさよ向雨ありゝ入日哉　去来

簾しく涼しも宿乃さゝりけ　荷兮

さゝき夜乃附あつさかね哉　同

打もりの人に逢ふ夕すゞみ　鳴海 如風

ゆふ石乃石橋や艸の下すゞみ　津島 俊似

涼しさや樓乃下ゆく舟乃音　公

挑灯乃ゆるゝゆるゝし扉の奥　卜枝

すゞしさや落て行る川辺哉　赤学

咲ちりて舟乃人ゆく蓮の船　岐阜 秀正

蓮みむは少しさゝやきいかゞせん　松坂 暑風

ひとゝゝ蓮く蓮かし蓮み夕べ　古梵

河骨に舟乃わかれ哉　芙系

そよそよと古かにおとの古井哉　七吐

すゝきりて時雨の沖乃浪かな　俊似

蓮あまり待せて結ふ古まつ哉　文蘭

川音く馬子のうたふる夜ふけかな　潦月

かゞりびら蚊の満ちてくる志づかなり　尚白

虫楽我めぐれに絡ふ志ぐれかな　一髪

虫ほしや幕と帰るえん楼かな　卜枝

麻乃葉やこはれかゝるの路　岐阜 李晨

ゆかた着に後子待る夜の夕かな　越人

錦乃花も色く葉手に似るかな　素堂

初秋

ちるや麻刈あとの秋の風　越人

梧乃葉やちりかゝる柳乃風　園解

玄斎雲みおのあるかく

一葉散音しめやかにまさるらし　仙化

くひなのちる山や稲の夕ぐれし　伊勢 方生

男たちき羽織袴の手向かな　其角

我白髪涙盛をぬきりるかな　芭蕉

幕や女乃も乃名をあらくき　文鱗

あさがほの朝に名残り見ゝ夕かし　荷兮

子を守るあたらしし何乃日にあらで　同

白露の紅をとゞめて萎るゝ草の　路歩

津軽の我あさがほ行くつしろ　胡及

あさがほやむくゝの水に残る月　嵐雪

蕣より葉ぞ揚げてそはゞきの音　去来

秋風やちりつきたるにふる花かな

涼しさを座敷より泊鱸かな　昌長

畦に乗物据るいなかかな　路通

やつむしは通る路より鳴すらん　一髪

きりぎりす燈台消て鳴そむる　素秋

あの雲は稲つまを待たより哉　芭蕉

いなづまやきのふは東けふは西　其角

ふきしほれても名はうつくしや萩の花　亡泉

ひよろひよろと猶露けしや女郎花　芭蕉

棚組ルあまりまきし蒲萄哉　作者不知

性わかしくかしましふ花野哉　伏見 任口

さえきりく帯燭でなくる虫哉　荷兮

行人や堀にはまらん月の暮　胡及

宗祇法師のことばによりて

名もしらぬ小草花さく野菊哉　素堂

とうしくの姨る根にこぼきすすき哉　俊似

仲秋

かれ枝に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉

つくづくと絵を見る秋の扇哉　加賀 小春

谷川や茶袋そそく秋の水　津島 益音

石切の音もゆるかり秋のくれ　粂下

笛のねや蟷螂出る秋の暮　卜枝

蕎の葉に人の息ぬる夕部哉　一髪

田には畑は猶見えける色紅葉哉　伊勢 一泉

山鳩か斧落る梢で笑ひけり　亨子

紅葉にはたかをしへける酒の間　其角

しつかんと物のめてらるる紅葉かな　東順

藪もん中に紅葉ちらりきる木枝かな　林谷

とにかくに地にちる紅葉のあはれとし　越紅

口から咲てとびし秋の宮柱かな　宗和

口から京に庵まろまりられし此
取もせぬ我ありと秋とおもふかな　加賀 北枝

桑実へまゐりて
菓子乃実乃めうけしさ蓮の実　越人

一枝の芒の穂痩しかたさかり　路川

松の木の間にうつる秋の蝶　亦栄

おとして秋にはぬ梢のさかな　胡及

くれまでからの市のまよひかな　[illegible]

関乃葉牛にあらめく
さそ始こゝに年ゝ苦は千ゝき　其角

よのまへ
まめしらて雨きりよ猶のよ　芭蕉

いそかしや無きの実乃枝這字　加賀 一笑

蓂の秋
ありしらく枝しの葉の白きかな　巴丈

志ら菊の花おちておはれしき　昌碧

山路乃きく無量をみちのかり　越人

一むらや似ぬ菊乃花さかり　晦鶏

荷分室に萩れ秋もぬの
とて前はなる古器出これぬ

かゝらけのまきこんとや菊の花　其角
菊の雨潤ふ人や綿帽子　同
りふまかりて菓作すゝめけりひとり　二水
かふらりて若き人の桜かな　伊勢 千閑
淋しさや櫨紅葉実落しけり　濃州 芦夕
弱る指ものこゝろもちかや梅かゝき　加生
芦の穂やまゆくらんおちおちあらし　諸通
初冬
あたゝかちのもみしも時雨　渋葉
京の人まつつゝけりけ　尚白
一夜さくに事ある初しぐれ
さらされ行母の出るこの夕　端水

万句興行に
えにしの遠き人の多さよ村時雨　孫方
人を待ちくらしたる年
星の秋は籾をとりのしるしなれ　蕗樒
時の雨の時のこゝろもしられけり　紫雲
後し守もり暮に見るしられけり　金下
こかれしよこ乃月の胡蝶ちるる　荷兮
一枝の柿の紅葉もかよりなり　一致
このそらく日は淋しき囲爐裏かな　同
枇杷の花人の月見て夜寝れ　同
心まれはむかふの子足なるかな　李晨
和歌の花も花の初雪淋し　那示

芭蕉葉はいつうらみてや帰る花　昌碧
麦まきて奇麗に成し菴哉　仝
ひとしきりや雲雀の声のあたりかな　一井
穂すゝきのふしぎにみえしあたら燈に　落梧
石臼の挽やめくおしやつるの聲　胡及
まつくろにとくさいなきの見え嫌かな　文鱗
あしらひ詞顔にうつる慕われ　卜枝
みな枯て風の袂をもふきはらひ　閑鳥
蓮池のかたちは見ゆる枯葉哉　一髪
寝覚にはいとゞ石きつゝおつるかな　松芳
こがらしに吹かれしまゝの寝覚の巾　杏雨
寝覚ねられぬ跡をかきなる草紙かな　蕉笠

冬の月
嫗を出て家なく月の面白き　野水
あさ漬の大根あらふ月夜哉　俊似

仲冬

ねぶとくる浮世の露の霜の朝　津島 勝吉
ちらちらとつもる木の葉に霜の朝　津島 守成
欅より茂る葉の霜の影かな　林斧
家の戸にほしく日にあたる霜の夜　李雨
いろいろの色になりゆく冬の日に　宗之
霜の朝せんだんの実のこぼれけり　杜国
杉棚の茶の葉かれて水の霜　勝吉
深き池水の中なる霰かな　俊似

つきかねてまんまるきりけり薄氷　琢風
ありありと何そこしる氷柱かな　東寺

兼題　雪舟

嶺より雪かきおとす塩木かな　萍源
ぬけるほど雪も舟にあふれけくさかな　荷分
積ほどこぼして雪舟のすゞしさよ　其紅
雪舟より雪舟川越すかな　一井
雪を舟汁やゆかしも東上きておる　雪洞
つりをつくれなくて雪舟の鼻やつけかな　含咕
末の海や利白鳥野鴨東かしら　皐忠知
朝夕やしらず雪舟の形　亀洞
ありとこゝろもあるらん友千鳥　村俊

井とかわりの上に内ごとく
米洗く男ハ冬し裸かな　冬松
河豚汁は冷みそ雪に氷室かな　利重
岸の笹の完かくしても見ゆけかし　亀洞
膝節とはく名にも出るさかな　塩車
出とはしと米はにありぬ名の種　かゝ　一本
いつくしも庇もはなはだきさし　長洞
名を残すとはよりりんはそろら　芭蕉

歳暮

餅つきや門にも松に隔なし　東寺
音もなく年のくれぬる年の暮　尚白

あち花の流れすてみえてちりぬ也　也来

なる近く梅つゝみゆる菜畑かな　亀洞

梅ちらし梅のさけける戯かな　一髪

　　ふるの自よくみる人のさかけ子
とて梓の実出しくれてくる年
　　の芽近うしありしかすりみせむとて
よし乃られ梓の実一つくろくれ

門まつ跡うちて蛤一荷かな　荷兮

　　　　　　　　　　　　　　同

田作まで気近ふよめの手さきかな　亀洞

雑

年中行事内十二句

供屠蘇白散

いとけなきとてなめてみる人ぞなき

　まつり来

としおとこ猪乃夜の宿ほどぞ

　不浄水臨時祭

沓音もきつるかげはさかきかな

　灌佛

手のひらやついてうつ洗ふ佛達

　端午

むかし嫁ぐ葵付け髪落し

　施米

うち鳴くにいきこえ米かそ出ぬ

荷兮

乞巧奠

やゝ楽よのし七夕楽そうさよき

鵲迎

爪繋も揺乃すゝしや二星之く

撰虫

笑のゆ事や足乃おれるきりぎりす

十月菊花

菊のきれ花之たそゝ盛り花

五仙郎

蘇姫に弟子指をもよろゝ

追儺

打ち伏てや眼まうて鬼の面

詩題十六句

野泉

人ゝ白不知誰計会ゝ春風春水一時来

詠わ〳〵流れ流るゝ春の風

白片落梅浮澗水

ゆるゝれすゝし流るゝ梅白し

春来無伴閑遊少

花ちるかちるやあまた遊人も

花下忘帰因美景

麻入ゐくとの川きせよ花の下

留春春不留春帰人寂寞

行春もこゝろへ給はの野るゝ風

厳風吹袂衣不定復不歎

綿脱ミて扨ゟ染字子ゟこゝろゝ
池照人蓮等謝
蓮乃事も以ゝかゝてる字ろか代
暑有余家何処有客来唯緑樹宮風
涼気ふて切ぬまゝつゝ此乃よし
大底四時心惣苦就中断腸是秋天
あやの旅ゟ逝ゝゝくハあし秋乃元
秋來風雨後秋氣颯然
秋乃雨を外に広ふかんもあし
遅々鐘漏初夜長耿々星河欲曙天
座とまつ寺ゝゝゝゝ夜もゝき
残影燈閑牆斜光月穿牖

猶ゝ香や流るゝ鳥子ゟよの月
万物秋霜能壊色
ふゝ〆や素顔てすゝむと秋乃霜
十月江南天氣好可憐冬景似春華
こかゝしもちゝし白ふつく山まくら
寂寞渓村夜残雁雪中聞
流るゝゝき出もこぬむゝやゝの色
白頭松枝御名纏
御名乃ゝゝ勝懐く白髪ゝ松
従問乃擢ゟのこし経日しも
きよゝに松ゝしくて
一泉

錦繍目立 かゝろふ雲乃夕ゟふいつきつふゝ哉

付木実　よる園に錦てらせ那しん乃宿
鈎瓶縄打　かへるさや湯のここち秋乃里
糊賣　あさ霧乃きわしまりかつくから
馬糞拾　こかしし乃松老葉ちきとつさえて

越人

李夫人
魂在何許香煙引到焚處
かけろふ乃抱つけてわかころも哉

楊貴妃
雲鬢半偏新睡覚花冠不整下堂
まろ風子帯ゆるゝる寐良からぬ

上陽人
小頭鞋履窄衣裳青黛點眉々細長

外人不見々應笑
あの数寄やむかしいまめ乃縫かへん

西施
宮中拾得娥眉斧不獻吾王是愛君
花かつら梅くらべし牡丹かな

王昭君
玉貌風沙勝畫圖
く乃ちもまきほめぬみ乃柳かな

一日留てとうするの付りて
寐やの坂や北御殿焼火子生に坊
枕にも生ん給書乃来る日かな
諸秋乃眠さむつくふ扇かな

鳴雲

彳　辰　巳

午
未
申
出銭
甘露
甲虫
海魚
川魚

水にむしよ蛍ニ上は蹤にうらも　桝水
深乃毒子武家乃夕ゐゐるすみ
あらし雨や鶴とゆるるの縁り
取まあらて生と息ゐ乃ちの麓　兕竹
麻苗乃上手をいらしはあられま
略実乃ゆ乃転長き日あし哉　含咕
枝なりし虫うりすの蜀漆かな　仝
秋ゆしうと翁引乃盆乃月
秋乃宿転川く乃火ゆ哉　含咕
牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾
是謂人
一方ち枝さく桃乃浅末こ那　越人

蔵舟於壑蔵山於澤謂之固然而
夜半有力者負之而走
かゝるうら深き乃市にくるゝハ
縣聖藥知犬盗乃止　仝
七夕を釣のすゝしもなきかりし
銀杏夭
数ちつし江るきもの八花火乃形　桂夕
琥有香
錦ほ乃ゐふなるよし秋乃那　市山
麻青
ほとゝきす此時は去りゆく　一井
師要

うつくしくすみわたる荊川　去来

一休

ぬれしのかゝれわしや月乃雲　湍水

清盛

門番乃にくらしもあきらうつゝ哉　嵐雪

山岩

松く山ハ霧す減るゝ岩乃角　湍水

海岩

苔しぶし浪うちこえもあらいそ　仝

名所

八きりすゝ風にしほる体諸田代　杜若

しゝ奥乃背や或ハ乃高沢山　蒼虬

かゝる湍乃雲ハ花より勝みかく　芭蕉

苧東一把つくして以後ゑるゝ河波ハ　湍水

嵯峨あたりくたびるゝ夕日あめの花盛　嵐雪

瑠璃色格眺全

香の強る思嶽さしても淀せきる哉　含咕

関あるとも宮山の似しるゝもさそ哉　宗祇法師

栄華関東より本乃山高く花乃
咲るときゝく咲しるゝ哉

背妝出し布子売り更衣　杜国

麦うゝや鳥も飢きき思空のさる　李由

五月雨かくれぬものや瀬田の橋　芭蕉

湖の水まさりけり五月雨　去来

まもなしや稲妻のあかりの中月白　一髪

角田川にて

いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥　貞室

みよしのはいろに秋立貝の名ある　被笠

いさよひもまださらしなの郡かな　芭蕉

夕月や杖にみなふる角田川　越人

九月十三夜

唐土に富士あらはけふの月もみせよ　素堂

暁の空のくもゝるる稲田かな　胡及

暁の空に菅笠のあとの月のかな　洞支

武蔵野やいく不ふもこゆる秋の山　示泉

湖と空かゝりてん村しくれ　尚白

かゝる時やとりあらそふ初時雨　伊賀　破友

むさし野ゝ柳はへとみちのはあり　洗悪

先つゝしけ信がもと蟷螂や小の奥　後似

みそれの猶轆轤やとのゝれく　洪薫　一笑

富士の宮富士芒蒙一つにかゝりけり　瑞水

分し世山も住大宮の夕かな　氷水

峯清のやしとみへとも鳴子なる　芭蕉

振るのゝや石波の小宗の短鋒　如行

猿

手ゝ能より上手やあらし峠かな　芭蕉

大和の国平尾村にて

猿の浮世似るる猿かな　全

桜咲く甲斐の賤家を通りけり　夕楓
日の入や、あまたくだれし桃の花　一蝶
のどけしや漆の光の生きさるか　荷兮
出かはりや服きくうしろにむすびぬるゝく　芭蕉
ある人の餞別に
わかれんと涙もふりて染まりけり　涼風
麻かりしあとに今は蕎麦を刈て煙やたき　みえ松
蚊とこそはうらに蚊帳鳴る後藤かな　昌碧
あらく雨や柱間と出し市のかれ　松芳
夕すゞみその名ある一志はなし　筆下
芭蕉子を送る
稲妻によそにも思ひつきたる別れ哉　泊雲

なきしても猿子すゝむは秋の障　一井
あき風や○ゝらすゝ引　曲女
揺りくし出てさゝく秋の力哉　示泳
ざるをそれくをすゝめて物思ふかな　嵐竹
さびしさはみなかくしてもむらはなく
文月の月も二人みえずなりけり　荷兮
越人旅立けるにはなむけにつかはす
月をいつ眠り揺つくしたるのうへ　野水
ものくれしものくれつくる小家の秋　芭蕉
蔦の葉もてはしからの秋のいろ　路通
捨飛騨にも梅墓南の千ゑむ
にもくもまりしくし

狩衣摘よ鹿くるゝつりかし秋乃山　荷兮

ともし〳〵稲葉もうごかぬ夜かな　京　ちりの

入月の今ハとちらし川ふね　玄察

みゝしけく釈迦のうらみなき夜ハ　一井

品川にて人にわかるゝとて

深庵乃墓は小乃秋の暮　文鱗

明けやすきたのもしき?ぬ乃聲　芭蕉

旅ねぬ乃こゝろやむしもなれ　湯浅　常秀

寫海にて芭蕉に逢て

いく度の芭蕉を見ても袖もほころび　荷兮

中ごろの羽織を綿乃入まりく　冊水

廿日用ゐるかの夏の時

あらしふくはての木の名　荷兮

天武なしの性多き寺乃普　越人

つくしき乃にふく御代の尤　釡下

里人乃さかりは尤くれ　宗因

越人と吉田乃驛にて

寒けれど二人旅ねぞたのもしき　芭蕉

旅寝してみしやうき世の煤掃　同

述懐

艸菴に暫居ては打やぶる時

消る時ハ氷もきえてはしる也　路通

子は獨守りて田は荒にけり　杜宣

金阪乃田乃蝗入ぬも浮世かな　落梧

こゝろ雑なし

萩花はわづか霜より奥の院　杜国

擂るかけりあけりするにほひかな　梅舌

高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声　芭蕉

あやめさし軒さへつゝかれのついでかな　荷兮

ますほに入湯はかゝらぬより一盃　同

一本の[illegible]ともあまりはねかな　素雨

肩衣は戻子にてゆるせ老の夏　枳風

似合しや白髪にかつく麻衣　濁子

九りけなは夜寒の夜[illegible]　[illegible]

かくれ家やよもぎ葉の中に隠る茶　嵐蘭

うき家は貧しき岸の[illegible]穂かな　晩翠

人のかくれ家をとひけるに

されはこそあれたきまゝの霜の宿　芭蕉

旧里の人にこはれて

こがらしの落葉にやぶる小ゆびかな　杜国

鎌倉建長寺にまうでゝ

落くるやたかくの宿の[illegible]　越人

あるゝのかしこみにてよそ[illegible]と

一葉ちらし袂へ

あさがほや[illegible]やさよう　荷兮

古[illegible]のらい[illegible]る世ん子

蝉なきや[illegible]雨や冷ん[illegible]の声　嵐雪

楷乃花よ穎子ぢぐまれ餘けり　丈草

月やまとぢうく耳也ちりよぢらし小菊　西武

婦もかなや勝乃繕子池年乃暮　芭蕉

寸婦し乃耳へて花の年の暮　除風

　春ともさしく盤もとおしらま

絹毛也ゝ敷よまぶとかりけり　越人

　衣ひ

まろ世さんとある人の素臭けり　伊勢　一有妻

言ぬくや宗乃ところも時まる　除風

聡出てく疎の花よきるる別けり　去紅

むし千乃月よ立枕かなしの秋　文闌

虫干に小袖見えしる女の秋　夕文

まのけし妹か垣根を落まけり　精

　いてお粉氏無謡家

雨白雲乃稲妻消む也月乃影　長虹

一夜くらし人をあぬまれをふけり　尚白

　まれしよれよ

つま行しと家もやしらけり紫花　荷兮

あつもちうく露は明るつおとなる　小春

妻乃名乃あらされしく神送り　越人

松乃中时雨く狐乃なきけり　俊似

ねむく火燵を明ていかよむ　舟泉

うれくねよ火燵消る別れ哉　嵐裏

山畑乃かよみぶつも茅けり　松芳

きぬ〳〵とさ数見えて扇かな　冬松
おもふしやきぬ〳〵の跡は淋しき　昌碧

無常

末期に
蓮花と思ふて阿弥陀仏と申　守武
　些小の風邪也
空つ数の見ておきもしの鼻穴　集下
末期に
菊名や空にもみえぬ月乃ほとゝぎす　堺　之順
松坂乃浮瀧と等への別なり
からびいひやりける
備りかほり哉見るまなもりや也　蕉ら

いなつまの迎ひまつ牛
手乃うくみかゞみて焼る宣かな　京　去来
あるく子うしなひける時よまれし
あじさゐの小瓜と見ゆるあき行かな　岡今
世をさらし妻の身ありけるに
形見月乃桐乃一葉となりぬへし　此水
辞世
あつかりし蝉宝乗一時にこえ行
子ゑを失ひけるに
何を袂乃あふて出るらん一羅り　落梧
一原姓あふて
たゝく声や小町か身の乃あはれさに　詢帯

妻乃追善に

なき人の...の男人をはなれて　自悦

李下が妻乃ことはりをいはで
秋もはやかけし衣の小ほころひ　去来

二府方まかりし夜
その人の鼾さへなし秋の霜　其角

母にわかれける子乃歌に
わさもやむかしを今に秋の暮　尚白

ある人乃追善に
埋火もきゆや涙の烹る音　芭蕉

孫をみまかりける人に
あはれ雪のしくのなからに消ぬかな　嵐蘭

高辺せしやむかし佛乃みなれ衣　加賀 小春

釋教

伊勢にて
神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉

負うたる母おもひしるかな御影像　嵐蘭

西行上人五百年忌に
まのあたり明残るさくら哉　蕉笠

おなし遠忌に
連翹やてらのほとりのまほろ原　胡及

うてなに慈乃宗はそれぞれ二重かな　松芳

木蔭にくくるも雨の花　杜国

法の○と扇てかくす花の雨　冬松

花に酒僧とも侘ん塩さかな　其角

貞享つちのへ辰乃弥生廿一日
東照宮乃別當僧正乃房に逗留
去卯年近衛殿より法華八講の僧ら
しそゝきけるを聴聞して詠侍る

座の品乃こゝろは
散る花乃行つきもなしくるゝは　越人

女房乃聴聞するを見て出家
世をは捨き嘆き給ひつ新女院御時乃
昔乃物まてきのふの鬼か此声の峰く
ほろほろと落る涙や彼岸乃鉄
花見て庭上乃桜咲けり　俊似

古寺や佛あれ乃菫草　一井

八島にて
海士乃家聖よ亡びし所生れ
咲へ手乃うりよん寺に牡丹　伊勢 千閭
雲山や高僧く乃江湖影堂　一井

東寺にて
漢僧乃法会生れ子遊子庵乃子　蕪葉

漢仏乃こゝ涙して寺かする　芭蕉

これ佛にて
腰乃あをきしれ花そろ乃御迹　尚白

舟より菴一日の法れかな　加賀 一言

十如是　一笑

なかなかの流れて通るしぐれかな　荷兮

即身即佛

文殊乃智恵ハおん乃師かな　昌碧

ほころびや修行乃絶なる夜かな　亀洞

なかなくや門かとてあやうく施餓鬼棚　荷兮

おりかけ乃火をとるむしの名月かな　探丸

石仏竜か碕の羅漢乃棚乃名月かな　文里

涙とも朝より涙とゝ向けかな　越溪

ならぬ通りあふるゝ世の宝かな　卜枝

擬態乃花しもくれけん雲の露　尚白

平茶施一切

擬作をなるゝ人の風ふきぬなり　俊似

稲妻の佛の世かな　落梧

越す道の明けくさかな　卜枝

あさく人の月の景色かな水茶

露ときえ不図をも感じて　荷兮

あさくさみ人の跡あふれて　荷兮

あるもの画のうて　其角

櫻も侍る乃數かつりうて

ものよしや月乃末　一井

作乃声ふ来佛をつくる法師

人のかなかあるてこる跡をし　卜枝

なるかな　さしくれかなく

売込て又これしくり一時匂　嵐雪

　鎌倉乃安国論きゝて
ねうとふ法や直ふあれらん　越人

　古寺乃しゃ
暁や伽藍し乃きえ遍い　荷兮

　同
ちれやうる二王乃片腕　傍似

つゝり切てこいまゝもむし宮似　一井

紅藤する人のさかや誹さき　文閑

千鶴かゝるもかせりし色のられ　其角

　藥ま品七句
　如宅を者収火

まん白よ正々の峠ろうこゑしけり　胡及
　如裸看得衣
看乃日や酒椙拾ふあまの家
　如酒人得主
猫よい乃ねむてよむこむつゝはれ
　如子得母
竹ろてくみけもとりつくさるけり
　如渡得舡
肉乃比漬乃核本きよまれり
　如病得醫
かくくとき清水くねる山もとり
　如暗得燈

秋乃霜やおもひもしらぬ起さまし

神祇

古ゝおやをしへる柳かな　釣壺

　二月なかる甘納に

於さしきや木伊る乃月乃梅　荷兮

志んしんと梅ちりかゝる庭火かな　同

嘗るもあふひてこそ神乃梅　長洞

上下乃さかりめやうに神乃梅　昌碧

妙たかてうかりうり梅乃中　釣壺

何しゅしゅ松るゝこゝし梅の花　越人

只くくあらし内てさゆる神乃梅　舟泉

月代しまつるる行くや梅乃宮　雨桐

門あけて梅乃瑞籬おがみけり　重五

詣るゝ人乃袴乃さかゝけり　玄察

猶ゆるふく遠景かさや森乃祭　蓮之

三よ乃藤川後すゝみさかりかな　中飛

水るゝ凌ゝ御秡乃中の燈乃杖　野水

ほのくらし秋末乃中と通りけり　玄寮

さかき乃灯をやかる火串かな　亀洞

破扇一つこそこなたへ行秡かな　来学

川ぞひ近く蓬まき小手水秡かな　荷兮

こかゝしや里乃子覗く神事踊　尚白

此月乃あんこは淡かゝらすかりかな　松芳

みえは小も林宮乃さかき池篇　旅梧

若菜集網

きさらぬ女も姫し神ならず　利主
社乃前　森　ちりそれ鹿の神楽かな　肥氷
涼森川　猿唄乃狐乃神楽かな　昌碧
かつらきや神ならぬ底かな　村俊
櫓杖やれ枝のうら蝶さしし　卜枝

祝

肩付をいくよふりぬ老の宮も　乞文
若分ら四千乃春
米寿も作さ仏まで申すかな　言丞
君か代やくらくまかきつくりき　越人
ますらをか何ちもされ竹乃石　鎌下

いきしろ月夜乃上手秋つらん　魚洞
千代乃秋にのぼりまさるしこと米　同
ちくりしかもれおりるく水戸きさて
先祝く枝さ代々乃ゑくひ飛つ　黄兵

曠野集員外

誰か花をおもはざらむ誰か市中
にありて朝のけしきを見む我東武
四明の麓にかくれ花のこゝろはこれ
をもとめて深川田のほとりいのすの山
あさ茶しといへる翁を宗とす又
其吟しれるることいの代
此句庵陽乃舟水子乃作として芭蕉
翁の讃えしをもとめて吟しにやら
此国舟人居とちりて宗丞此句誠
感じてむらしあつめしたる人乃中
に虎乃捲簾をもて手遊とせし人

ありて独色は露のならし誰乃
おもふへくさくらのたのもし猿蓑
皆々宗まれる声乃あるまじきよる
も宴乃字考杜乃とゝろあるとも
狂居の句とそしらめく
表とわられ京都におもはぬ居隠し
この文人乃手つゝりしとゝけされ
しとこ人闘に家居も吟しく
手をさしかけし筆乃うけるゝ
積乃跡も志とろしまる乃鍾く
も乃志つらぬる杖くし米く
門乃名肉誌園乃やまもふし

舟水
荷兮
越人
水

風乃目利を初秋乃雲
武士乃庭さへ山も和らけし
志どろまついて勝乃噂きく
懐より経を出しまたるらん
はらりと濡ぶれてある四月雨
立ちくの配物音する屋乃端
手白いゆて出家小山乃つらう
拵きれて一家揃も咲み篤かり
あてにもならぬ月掛乃秋
玄旅乃身に深乃やうかある
秋代無をなく姿無人乃女房
悄るやうと西も東も諸乃声

兮　人　和　兮　人　兮　和　兮　人　水

さらしなやうする利根乃川舟
みそれねぶりてかくしておき黒き
承みあけれと招絵うらゝらく
ふらしときのよ乃市の煙なき
払つきともや人乃かゝし草履
指米乃脚気乃比乃つくりと
さやくこゝろの名付えつる
月乃秋ちり会えりけつ出穂
秋よろふなる里乃酒桶
東志くれ歩わと出る黍をひく
うかれとよの屋何乃義朝
かしこまる諌に残こ何ふかし

兮　人　水　兮　人　和　兮　人　和　兮　人　和

火筥のちりて手乃あつきかし　兮

うくもちの兄によとんのまうき　人

乳やましと汲ゝく池乃かたてさ　水

衣さゞ来て殺けいたし定る　兮

捧ゝく走る婦るさかり帳ちう柴　人

思ちて悦ひて正月とれわかれて　水

大根きざゞく午にゆくらし　兮

靑苔や流に志のゝすん瀬と里　亀洞

はつれ雨るに滝乃わきし里　荷兮

のうちしや雨き峰を解て　昌碧

百合乃櫻る葉さきしわ木　野水

夕月乃雲乃白さをとうら詠　舟泉

水音乃葉と袖に引きせ　釣雪

萩の露ところもゝ去る始ぬもゑ　手

一涼ゞして□らし古綿　亀洞

道乃ゑしにころ来し行宮稲森　荷兮

来すも妙眼水の秋毎やふ年山里　昌碧

いつもをかなくてあゆにする蔵造　釣雪

湯あまいの里のとしむらし　舟泉

涼しやしと遠かてくる川乃綿　野水

さうかきもしや手は有月　荷兮

秋風に女車乃髪なとこ　亀洞

袖にも誘ふ手に露紫乃法輪　釣雪

はつかめさくらもちらぬ花の暮　昌碧
八重山吹ハそちらちるとし　野水
日のいりてやゝ雨ちかん暖子　舟泉
人やりけふもこそ娘哉　利　亀洞
向あけて宗やるれての小野出て　荷兮
振り髭ゝく人の花すみ絵番　昌碧
硯水して干魚の蔵巻くえいく　洵也
家主よふさる寿の御れく　舟泉
むく起て抱いひつらく赤驕色　野水
門とるにの帯子よむでも　荷兮
いさこてらく足擦所の荻深し　亀洞
杉毎日達ありそれもる雨城　洵也

晝もかはらぬ曇りの下戸の月　昌碧
やゝさむく秋の宮をあらためば　野水
うきふしも杉にかゝる寮の窓　舟泉
おもかげをゆきし安房の小湊　亀洞
あたりの色ながるゝ浪の照りて　荷兮
楠の根つよく入しよひとり　昌碧
くれかゝる風呂屋さして出行　洵也
ついてくる堂へ草の糯追　野水
菜しき餅うきろりすまの水　舟泉
柳のうへのかきまさりの智　重芳
夕霧の深き橋をわたりてかへるらん　冬文

きゝいきやくしみえんゆる月影　荷兮
秋草のとてもなきに咲みだれ　松芳
弓ひきたらる勝ぬ様とく　舟泉
代ふも今の拾むとうち生る　荷兮
白すゝく鶯の巣の中のねし　冬文
火燵の灰の紙銭なきく　舟泉
猿ひ啼しようく紫日つく　松芳
するどき柴を踏もつして庵まる　冬文
酒の上手に掛かけても品川　荷兮
米算するにれかせん眠しき　松芳
くらふて双六の繪紙笑みふるる　舟泉
なかふるもうちよつてする花の良　荷兮

月乃穢や花なる井乃君　冬文
竹にすゝ眠れはらひつゝまし秋風　舟泉
蹴鞠ちらけく根泉の方へ　松芳
紀辰か入道ゑ婿の志かゝく　冬文
十日のきくの折しかるゝし　荷兮
山里の秋たりし生簸　松芳
本掛かふしくへるやくさむ　舟泉
さふくとふられ流るゝ月の影　荷兮
馬のとくれしてる乃いかく　冬文
きひしさち金舟乃宿乃冬雨　舟泉
茎麁まつく蓑笠あふつゆ　松芳
つくくと漏すゞ月のうらまく　冬文

晩ふく桜婆に　よむ　　荷兮

けしの花とふみたふまれ　　松芳

味噌するをとの隣さはがし　　舟泉

黄昏の門さまたげに薪おく　　荷兮

法事しまふてさらにあそばれ　　冬文

窓の影寒々ありく鬼　　舟泉

都も遠く旅寝より　　松芳

きさらぎや瀑をかへ秋をこえて　　冬文

かく面白き山口の家　　荷兮

ひとりきれ添ぬ人の折もあり　　荷兮

雨の夜まで戸の口　　野水

月すこし車の跡のかはきけて　　同

あふさきるさに行く人のかな　　荷兮

肉の秋旅の道はないつるし　　同

一筆かきかくし旅の枕の　　野水

初あらし寮の坊主　　水

菜畑あまり　　仝

土肥は多し　よし掛く　　兮

京割れば袖そ払ふ水　　仝

適路のついきりとけて迹かす　　水

六位よありし鳥のうはきさ　　仝

代まいるてやさしく清水のさ　　兮

殘一母さ　第一　　水

月乃影寄はなるいとくるし舞　仝
花咲たりとしらまくらり松本　兮
天仙蓼よ冷をあはし素の香　仝
みえるゝうけよ宵経乃中　水
たゝへとありてまん袖うらをとて　仝
よせくるしきし酒ついてやる　兮
鵜乃やゝ明日ふ経澄なふ八甲斐　水
秋乃あらしよ昔滞　陰陽　兮
絶えてゝくれよくれすなるし生尺魄　水
八日九乃月おもましいてまく　兮
山乃端よ柏と根とのかたらなる　水
きつきるをここよるゝくとする　兮

思ゐきし夕や役乃けふ引むすひ　仝
太皷たゝきしよ障子のあけるか　我
こゝろしと探さる本経乃艸枕　兮
氣たてゝ乃たきさと舞あける　水
見てもいまゝめ寿ふて十二年　仝
庇をつゝく住居うちも思ゐあか　〃
こゝろ乃ねむつりしと火よらさる　兮
供なれ乃艸鞋を谷くさきとて　我
旅くや小墻大原嵯峨乃花　仝
人おひよれはるの川山岸　年
肩さしのかはる元是ハ皆乃思ゐもなくなる

おもしろき柄でさしたるはよき團也く
宗祇法師乃句ですむし出せば夜乃
衣乃痕といふた紙まれもやぶれつきぬ
月に柄をさしたらはよき團哉　越人
蚊乃打る声うり夜の衣の痕　傘下
とらへてうかゞ筏に乗べくこそあれ　同
打毋ひうたがしうせ蛸きしの宮　人
きゆ海櫓つかへ打さくるちちかな　同
使乃者に返しのまゐらせ手紙　傘
あれこれも瞽乃子と遅る乗る　下
としよりてまてはふくしかり　同
とてやる手乃節を捨て柚の花　同

まつ打もさけは流れ水　白い　人
衣野乃人は法華をとなへ来て　同
月乃夕に飽瓶笛うつ　下
谷の橋も又ふみならし濡し　同
秋乃夕しれ畑みたかる　人
何かふる事つかい世は宮くへき　同
濡ふかしまる宮よのゆかな戸　下
花乃かたらして居る流落つ　同
そろめし瓶乃こそき春風　人
うち祥て浦乃世なる乃語るよ　同
門へまらりて打流ゆる　大　下
碎きえんの手の飲まる沈む哉せ　同

ゑそきつかうる雨乃降出し　人
歌合猶古謙首まいらせて　曰
まるい献立乃さかなはなり　下
新屋乃池こかして押へし　曰
白きおとせんきくしくも飛　人
ふく風にゑのこ乃穿のふくくと　曰
半ハこぼれ穂や初乃秋　下
むつくりと起る嵐の秋に傾て　曰
人の詠はいるかのこともかし　人
にきはしく爪や箕をと出ひ込　下
寺中は盆乃ころよ町中　人
おかくくとふる詠乃霜の昼時分　下

皆同音に申ス念仏　人
百姓も麦に取つく花盛　下
田楽きれて櫻淋しき　人

深川の夜

雁がねもしづかに聞ばからびずや　越人
酒しゐならふこの比の月　芭蕉
ふぢばかま誰窮屈にめでつらん　仝
理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人
瓢箪乃大きさ五石ばかりや　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
なに事も長安は是名利の地　仝

医乃おほきこそ目くるしけれ　越人
いそかしと師走の空に立出て　芭蕉
ひとり世話やく寺乃跡とり　越人
此里にふるき玄番の名をつたへ　芭蕉
足駄はかせぬ雨乃あけほの　越人
きぬ〳〵やあまりかほそくあてやかに　芭蕉
かせひきたまふ声のうつくし　越人
手もつかす昼の御膳もすへりきぬ　芭蕉
物いそくさき舟路なりけり　越人
月と花比良乃高ねを北にして　芭蕉
雲雀さへつるころの肌ぬき　越人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝

みそきふすまひしき書のひきはき　蕉
家なくて服紗につゝむ十寸鏡　人
もの思ひゐる神子の物いひ　蕉
人去ていまた法坐の匂ひける　人
初はせにこもる堂乃片隅　蕉
なをゝきしん氣のあつく宿中に　人
稲穂のさらけ露はこほれて　蕉
あやにくに姉から先にかたつきて　人
何のわしかたらみうしつむそ　蕉
此月のうへの宿まて消きうに　人
弦もえらく鶉中いれあり　蕉
秋の田とからせぬ公事の長ひきて　人

きいくかゝる文字同しくゝる　蕉
いかめしく瓦庇の木葉や　人
秋をさゝる子乃瘦てらひかき　蕉
むかしは議義条もうらやまし　人
田ふしをうつく腹きしらち　其

翁に伴なはれて来る人のめづらしきに　其角

落着に荷兮の文や天津乙
三秋さの有名でふらりくり　越人
菊萩の庭に畳をとりつりて　仝
鉛をいらるゝ茶もてあまちる　角
明かかりて禅ゆけるる衣　仝

進きありみさくなゝつなの多　人
眠かる流あつりはよらまりて　仝
静御前ゝ舞とられける　角
空塚の髑髏の松乃根にはよ　仝
あとおりける今二万両　人
いとおしき子と他人にも名付けり　仝
やけとなとして只しつるよふ　角
酒熟さ耳みつきゝるさて立えと　仝
魚をともつゝぬ月の江の舟　人
そそいろの富士八浅茅に秋の暮　仝
なとさしかゝる草乃一瓶　角
饅頭とうかしさ袖みつくゝる　仝

うき世につけてなぬ人ハ捨　人
西にあれ東方稲も見まハさん　仝
よしや鸚鵡の舌乃ころもき　角
あちきなや戸にまちまてる恋の筆　仝
悲心の報いも逢ふ嫌さのおん　人
や杉垣ひ庭むしねる法師て　仝
米つくきゝハ師走乃けり　角
夕轡宿乃もちまた猶の前　仝
いくつの笠と荷に強力　人
宜いら手塗うちその山衲　仝
ひいかきりて伊勢の八朔　角
満月に不断さわると詠めきや　仝

念者法師ハ秋のあまくせ　人
夕おもかれおもうらめしき姿子　仝
方ちくひする家あけのましと雲　角
夜さらさりと金の鉢守娘ひて　仝
かのきしらぬ馬士の闇とり　人
花の香にあさつき勝ちきりし　仝
むしろ敷へき鳴の讀の書　仝

なからし新酒ハ人の膳やまき　嵐雪
秋うらぶしいつも湯婦　越人
周の細書とけらう縁かまへて　仝
お面菜の草なけに好　宅

さゝあひて牧ふましらぬ里のゐる 仝
川越られし塒下のこちら 人
痛察鳥の遊とる行し蘆の穿き 仝
冒す守いちくる声行そり 宮
ふるゝいろをおれしのうきなるみ 同
後をひよ人とかふゝを置るみきし 越
気軽よりも波あるまる玉かなき 人
御物をなして かゝる浪人 嵐
そんわと襟まうそし一ゝ 脱 宮
哨日ちる姫るれ姿百合の月影 越
あゝ言の鮮て渡わる女 宮 人
つぎ木の医者ぐ後浴 や 宮

ちる花よ日ハくもれども出世 越
なふこゝろハ浴とふふゝん 人
初雪やこゝしのひゞる桐の末に 亜水
日のみしろまし力の朝起 溪梧
山川や粉の姿むのときられん 仝
鍬を遠かしふゐへうりなで 舵石
おの母まよ押食月よ草卧流 同
あしくとし 芒犠の萩 溪梧
川越の歩みさゝれの秋の雨 水
おかて痛ゐる私のきゝいふ末 梧
けふせこ流つゝふくゝゝる縁の下 水

ちかくきく舞子は坊乃うきこゝひ　梧
まつる頭乃湯をむつかしと水飲て　水
こそくらり起きて扣径かく　梧
峯乃雲あちらにあちらとて出すり　水
総らすれうちのふ寄龍さ　梧
京ゞは西子あまれいつまでも一文よ　水
下戸ハ賭いく月の松本ろまう　梧
耳や歯やなうても花の数知るを　水
多く遊びはやまれ山乃初年　梧
いつやうも営るはすめ昼松くに　同
山徒侍て人志ちはなしなり　水
ふりふりとらさひぬけ小車　倍

挑灯ふるく祇園さまられ　水
何ゆゑと泣る顔を揺あかるひ　梧
志らし梅もいをめつね本来　水
さうしとらやうる馬子ふうきのまく　梧
うは蒔中流館柳一里もり　水
雨やこそ雲のちぎるし宿白や　梧
柳ちるりめく例の遊ひ　水
軒ふかく月見えざりけり十ゐ　同
家しよ秋流女夫居てなり　梧
ちかと上手に納めるうへやまし　水
乗かれまるれいふしへの酒　仝
軽よの干魚待るゝ川端に　梧

淋しさを紙先へ見てくとる　円
春雨乃しとしと降るあえもの　水
ねふさころへと雲花移りや　梧
一里乃炭賣ハ只みて帰る　一井
かねひの先の瓶氷る朝　嵐深
さきくさや西は地引に讀るらん　胡及
肩きあてられ福子なる人　長虹
夕月のかきは軍さ壊きハ　嵐深
たゞいくに錦とつくこ込秋　一井
里海く踊ある二三ト　長虹
去歹ゥ妻ふゑるむれて憂　胡及

間ハ作くて湯并抽の云かくる　一井
菖蒲にとくさく切わらく文　嵐深
うらくしと寝教ぶる以湯と見ゆる　胡及
宮ら御く夜中の越乃竜瀬　長虹
なふきゃうよきてあひてハちら為ね　嵐深
蛤よりいるゝ女中しる剃　一井
浦風に脂咲まる周涼し　長虹
みるもかしこき紀伊の亦還益　胡及
名者のさし矢射く折る花の咲　一井
恭ら小香牛し遠さうそなり　嵐深
はるのられあるてきしくも眺らん　胡及
手子乃綿乃裾二落つく　長虹

むかしよりうちはさいくを洗　嵐滓
夜ぬなとある娘子を釣なり　一井
木芝さらにあるまろし松の枝　孟紅
拜よりるゝ人くゝ乃白雲　胡及
此年みたまてゑの頭も初来　一井
満らるも茶むまつい疫入存　嵐滓
光ゆるらく涼子乃陰乃られ宮数　胡及
こをきゝおはに法然森の王　孟紅
御衣艘入道との衆乃そう高乃ま　嵐滓
家別ふる人乃足く音　一井
毒なのと唇一まれも紫ぬし　孟紅
屏風ゐちらく色うれ白雨　胡及

板敷さく踏れるまゝ庭乃内　一井
さび乃ぬけゝる寒来磨丸　嵐滓
ぬくゝと日足乃きられぬ花墨　孟紅
見ゆるにて訂うちておつくし　胡及

ひさこ

江南乃珍碩我にひさこを送れり。これハ是水をいるゝ器にも
あらず、かつ是酒をしたむ器にもあらず。或ハ大樽に造りて
江湖をわたれといへる、如久舟にも異なり。心後乃
恵子がしらぬ用ることを識しられつゝ、くらゐのみよりに瞻り
あやまりてはうかりに価る醍醐くうるは日月湯秋きしらる
かれしらぬあはれの閑寂郭公もうけることを知く句を
吾知人ともなへきしりて此風雅乃藻思をいへる
まことは是いつれのところにもかく乾坤乃おちつるを得
出しぬるよし紙に云くる世の汁内にをさめ入

越智越人

元禄三六月

花見

木乃本に汁も鱠も桜かな　翁

西日のどかによき天気なり　珍碩

旅人乃虱かき行春暮て　曲水

はきも習ぬ太刀乃鞘　翁

月待て仮の内裏乃司召　碩

籾臼つくる杣かはやわざ　水

鞍置る三歳駒に秋乃来て　翁

名ハさま／＼に降替る雨　碩

入込に諏訪乃涌湯の夕まぐれ　水

中にもせい乃高き山伏　翁

のかるゝと唯一方え旅しけり　碩
わづらひし前より悪つのりて　叔
おもふ事すゝの啓つくも水て　翁
肉うんもし新の神杉かき香深　碩
秋風の形とこそし波の音　叔
尾をゆくうちや白鷺の雲　翁
手許讀花の露の一句因　碩
巡礼銘める夜の身をせふ　叔
何よりも煤のうつれあかねる　翁
文書たしの力さくなき来　碩
羅ヶ日とりしなるくれから　叔
無世えるさきと泣するひけり　翁

手本手紙の写書か　碩乃　碩
頭さぐをけりあるさま然詠ん　叔
双六乃目とのすゝくまゝく若かき　翁
假乃摘御にむうよ念御　碩
井しゝ土間に居出て番すわし　叔
泉名は里乃なふ宿かのくし　翁
時乃さらぬ譚の形と去　碩
月散しに唄流る肉　叔
花落ありまるけそうら樵く　翁
唯里乃動る草　番ふ好くを語　碩
一貫乃讓むつゝし水孫乃　叔
鬱去乃ゝゝ繁宴は館あを別　翁

花咲乃 芳野あらしを吹廻 升
蛙ゟさく ろうく寺乃山中 硯
翁十二 路硯十二 曲水十二
いろしの名りおきてハし東乃舛 弥硯
うれしき蝶乃目を覚しめる 翁
蝙蝠乃のとつまつくとさし出て 路通
かゝる簾のとぎゝゐ涼越より 仝
紫る檀乃実成りおとまのまく夕暮 硯
親子ありひとく団子ねらよ 仝
秋乃色あらものそうを拾ひをり 通
こそらゝ行くハ節上 侍 仝

うつり香乃羽織を首にひき素て 硯
小六うたひし布まんうくる 仝
鮓筋乃ちいさくアみゆる川の端 通
念仏すてわうむらつのき 仝
こうしらえし茉もう小の年の暮 硯
底船く里乃なよれとまとれ 仝
旅姿稚き人乃嫗つれと 通
茄子てありいて月ハ残寂 仝
志られのさしたる縁のかまて和日あり 硯
生鯛あくのる浦さん東よ那 仝
氏村乃隣手に医者の病めり 蓉兮
ころちんをけしそのきりとらふ 越人

かゝらすは寺は退屈もせさるらし　兮
まくら泣出しは河のさむしさんきハ　人
ならぬんやる秋の夕ぐれおもしろき　兮
蕎麦も白し山寺胴中　人
うゐんう里のまつりの月も秋　兮
ありかとさつまのうかれ裸むし　人
名つけしやおさむ蔵しとえらさうに　兮
文殊のちゑも繁持の来客　人
あれか減又とハ生れ味噌　兮
何ともせぬまゝ落る霜　棚　人
きのふの根のなかうへつゝて笑出す　兮
産子より親をおふぬおふーて　仝

汗の香をとらえて衣とらは　人
あつまりに雨はうちありてふる　仝
花さかり又百人の猪ちまり　兮
まかみて旅人も衣きる　旅　仝

玖顏九　翁一　誹通八
落兮十　残人八

燈下

鉄炮乃遠ざかる里の卯月かな　冊径
朝の小麦乃瘦せてくろうし　里東
西風ふきまくての小見捨って　泥土
なまめかる一つ鍋ひ〳〵〇とより　乙州

甚いきかひ二人ちかひかるを納よ　怒誰
秋の夜番の丸こそへの鐘　弥硯
女にて花も細氣子なきそれなく　年
団の中にれもく見失かちなる　珊径
分ふも又川乃ふ咄しをさく覚へ　里東
新乃れうしき生つきたり　游刀
なるふ白神主なきうる處なく　乙州
一里二百り山の下刈　怒誰
見知る所く出て居る足も冴る光　游刀
暮れ黄い洞雨としるれ心く　里東
売ふ京越の柱女の寒さなれ　珊径
幸牛につかく下百の誹　乙州

内裏ふ夜舟をよんでまたなりや　弥硯
煮売の姥のかうさ果ぬ歟　怒誰
らぬ喜ふ仕くも旅立つものに　里東
出上和去遠の坊と流もなす　弥硯
乃みふ乃居間の葛の一葉　乙州
あきをらちの乃てる緑なる　珊径
附くハ石船まても鳥帽子きそ　怒誰
破石を見物ふ備御乃路　游刀
多みそうさハ取遠笑乃流やらん　弥硯
連も力も皆夜たなり　里東
うし風乃大田寺縄手吹透し　珊径
虫乃こなるに用叶へさき　乙州

擲剛き眼見んふちつきさし雲雀哉て　汯士
夕辺の月に菜合は哽出るは　黙誠
有経の嗽み晴きるら噫気哉　里東
四十にて老まくらをよき涼　珠碩
瞽女らもにそ秋の浪て浪まして　乙州
碑の細目にありて啼らく　雅径
松村の花は茄菜に雨氣つき　黙誠
田舎ん片隅に苗の出るはし　沾去

雅径六　里東六　汯士十一
乙州六　黙誠六　珠碩五
筆一

新
色の甲享るも財もて嗚るもの　乙州
悪年畫妻に猶のふく音　沾水
百姓の香衛は住まへハ名のきて　里東
少舎ろんゆしかしらんの縄　探志
独寝もし奥のあるひゐき旅の月　宥寿
端妬きなくゝきゆる川雅　正秀
秋荻のむあよちるき坊て流　及肩
風見るれか減の志つゝし乃り　雅径
常る花宮るき声ろて鳴出し　二宵
見れやうらみ紙葉のすこの歴　乙州
初花年雛の出で稿に払かへ　珠碩

ふ乃そこに悲しくあり夕涼
里東

雨の夜乃香に吹さしあひし笛の段
探志

庭ましに起て閨を立帰り
昌房

袖入の中よりもらす月夜哉
正秀

あらし上京もてはやされむ
及肩

蓋に盛る舟の町家の年来
野径

若緑花のよい菴乃つぢ[illegible]き
二嘯

うす黒る日ハこんみりと[illegible]て
乙州

誰かとひたとし[illegible]声の出る[illegible]
珍碩

深くしうきき本経読の[illegible]
里東

探にやすく行[illegible]の
探志

暗るかりし廿薬讃の[illegible]も下付
昌房

[illegible]と呼る露まゝ[illegible] 口
正秀

いきり[illegible]一節り[illegible]
及肩

[illegible]かゆる館棚乃秋
野径

さいしと切綴の紙さに風吹て
二嘯

[illegible]乃[illegible]の[illegible] 月
乙州

[illegible]の[illegible]く[illegible]
珍碩

[illegible]掃うらハ[illegible]子居[illegible]る
里東

[illegible]とめられ[illegible]のうへをとりあけて
探志

こひ[illegible]かしき[illegible]上 侍
昌房

[illegible]捨[illegible]て[illegible]まけ
正秀

[illegible]を集る寺の上 [illegible]
及肩

[illegible]の[illegible]日[illegible]て
野径

さゝらにも獅子の舞の風　二嘯

乙州同　珍碩仝　里東同

探志仝　昌房仝　正秀仝

及肩仝　曲水仝　二嘯仝

田野

畦道や苗代時の角大師　西吟

明ほのゝ雲山鳴子の聲　珍碩

崩れしのわかやぎに晴れ黄の光　仝

かまぬ松しき門口の文字　秀

肩ならべ利休の家と京の室　仝

夜しら芋といふ名をなかし　碩

出そ世つれしよ帰るやらむ　秀

片寂しの来るくる寝覚める　碩

髪ゆひと石も重ねて剃る獅子　秀

なつかしの顔せし女の侍　珍

次にては兄の背に帯を巻く　秀

狐の化けるに赤かゝまへやる　珍

肉やる師走の空の旅行　秀

学頭の居りに猫の縁の役　碩

いつしか大猫搭れもたれて　秀

猫のまる子に纏はる翁を教への　珍

江戸酒で花さく夜に寝ずけり　秀

あいの山寝事の入相　仝

雲之住所里ハ厳嵬ろき数一　碩
やゝと吹く落る禅門の袒又　秀
松堂ハ寺と嵐響のきこらし組　碩
羅綾の袂なれり落ひめの　秀
歯を痛む人の姿と絵にかく　碩
澪舟やはらかにしき濃さり　秀
蕭頭の窓に真似を捨をき　碩
以上果あいみさまの時窓　秀
月に出るゝみ小判よそゝよる華様　祇
我入相る脱落　ゝ　環が　秀
柴を添る結ぬく肩ひる孤る飛　祇
す布子のとゝ脱ぬくやりり　秀

沢山に瓦鬼くと咲しれてく　碩
呼ありりしゝ猫ハ鳴しけし　秀
子叙啼ふ人町ーみ雨ありり　祇
やー国ありり楓木の黄満ニ　秀
散るほに雲錦捨つる吉ありて　祇
小世く　てのゝ坂けへうゆるうきをうふ　秀

正秀十九
珎碩十七

呉市阿賀町原一九九
下垣内和人

木村